

茅コンファレンスを巡って

宅 間 宏

1. 茅コンファレンスのレゾン・デーテル

茅コンファレンスについては、2度（21回・38回）世話人を務めた他、何度か一般の参加者としても出席する機会を得たが、その経験は私の人生の中でも大変幸運に恵まれたものの一つと考えている。

茅コンファレンスは、しばしばアメリカの Gordon Research Conference（以下 GRC）の日本版と紹介されているが、GRCにも何度か出席し、1度は Coordinator も務めた経験を考え合わせると、私には両者の間に歴然とした違いが認めざるを得ない。私にとって、茅コンファレンスは GRC にも、また他の国内外の研究集会の何れにもない魅力を持つ、貴重な研究集会であった。

私が経験した GRC は典型的な最先端開拓を目的とする会議であった。出席者はコンファレンス課題の領域で、現に活発に研究を展開しつつある研究者に限られ（その限界は緩やかなものであるが）、そこでは最先端における未発表のものを含む最新の成果を発表し、率直な討論を行うことによって、さらに発展させることを主たる目的とする。

したがって、原則としてノートをとらないこと、スライド等を写真などで記録しないことが公式に決められている（現実にはなかなか守られ難いが）。

そのような特徴を持つ GRC は、激しい競争の渦中にある研究者を刺激し、更なる進展を促進し、新たに発見された実験結果や理論的発見に関する解釈について討論によりコンセンサスを形成する働きも持つ。その結果、GRC の直後に、その成果と見られる多くの速報が時期を同じくして有力なレタージャーナルなどに掲載されることになる。会議の終了を待たずして（たぶん予定を繰り上げて会議で得たものを少しでも早く論文に纏めるために）急遽自分の研究室に戻る参加者も少なくない。

それに対して、茅コンファレンスは広い視野で課題を掘り下げ、その成果として、単なる最先端研究の促進でなく、より広い視点で長期的に課題を見直すことによって、質的に新しい発展を刺激する働きを持つように思われる。この点で、茅コンファレンスは私にとってユニークな研究集会であった。

2. 茅コンファレンスの世話人を務めて

(a) 第21回「光と物質と情報技術」

一連の茅コンファレンスの運営をずっと支えて下さった飯田修一先生の密接なご協力を得て、世話人として宇奈月で開催した第21回の「光と物質と情報技術」は、レーザーを中心とする光学技術と、広範囲の物性物理学と、これらの情報技術への応用の可能性という壮大な領域をい

ろいろな立場の専門家が議論する事によって、極めて先見的な場となったと思う。

上記のような茅コンファレンスの特徴を生かした課題設定であったと考えてよいのではないかと考えられる。当時の初期的な情報技術の中で、光の利用を考えることは、かなり思い切った飛躍であったが、あえて提案したのは、茅コンファレンスの上記の特徴を活かす課題と考えたからである。

最近応用物理学会の事業として、量子エレクトロニクス研究会の仲間と一緒に「量子情報技術」のアカデミックロードマップを描く機会があったが、その作業を通じて、未来に大きな展開が期待される雄大な最先端領域であることを痛感した。

そのようなユニークな討論の場を作り出して下さったのは、その中心に居られた茅先生の影響が大きかったことは言うまでもないが、茅コンファレンスを責任者として実行して見ると、度々、或は毎回のようにご出席くださった、私にとって真に大先生と呼ぶに相応しい方々であることを改めて痛感した。

多方面の錚々たる大家の方々が参加してくださり、テクニカル・セッションにおけるディスカッションは言うまでもなく、このような方々とコンファレンス会場は言うまでもなく、エクスカッションなどの際にもお話しする機会を得て、私の専門的分野に関連する多くのインスピレーションを与えて下さったことは、忘れ得ぬ経験となった。

重要なことは、私とは異なるご専門の先生方から、はっとさせるような啓発的なご質問やご意見を数多くいただいたことで、これはめったに得られない貴重な経験であった。

因みにその際の集合写真（グラビア頁）には、茅誠司先生ご夫妻を中心に、高橋英俊先生、久保亮五先生、近角聰信先生、霜田光一先生、鳩山道夫先生、森野米三先生を始め、大勢の大先生がたの懐かしい顔を拝見する事が出来る。また同じレーザー分野でやや異なる領域の先輩として多くの有益な助言を与えて下さった林 巖雄先生も茅先生、高橋先生の隣に座っておられる。

これらの先生方は、知的好奇心に富んで居られて、耳新しい事柄にいろいろと質問をされるが、その中には特定な領域の専門家が日常的に思い込んでいるが、客観的には他の視点も在り、その新しい視点で問題を見直す事によって、単なる定量的な進展でなく、定性的な飛躍があり得る場合が含まれている。

いろいろな分野で偉大な業績を挙げられた先生方のご質問やご意見の中には、日ごろ当然のこととして専門家の間では了解している事に、他の視点があり得ることを巧まらずにご指摘になっていることが少なくないのである。

(b) 第 38 回「光科学の新しい展開とその応用」

第 21 回茅コンファレンスの後のレーザー技術の進展は著しく、物質科学や情報技術との関連がより広い視野で、具体的な形で論議できるようになった。特に新しい展開として、極端パル

ス高出力レーザーとその応用の飛躍的發展、原子のレーザー冷却やボーズ・アインシュタイン凝縮など新しい展開を見据えて更なる發展の可能性を論議するのに十分な基盤が構築されてきた時点で、もう一度光科学と物質科学や情報技術との関連を見直す茅コンファレンスが裏磐梯で行われたことは、誠に適切な判断であったと思われる。

この回は植田憲一氏、三浦 登氏のご協力を得たが、飯田先生にも一方ならぬお世話になった。

特に光科学が広範な学術と技術の領域と密接に関連し、その發展が如何に大きなインパクトを持つかを多くの方々にご理解いただくことで、絶好のタイミングだったと思われる。

(c) 茅コンファレンスの終焉を迎えて

最近のように、研究計画が学術的価値や創造性の高さよりも、いわゆる「客観的評価」によって実績を計る尺度とする傾向に、研究成果の実用的な価値を重視する傾向が加わって、(役に立つこと、直接の経済的効果を持つことは素晴らしいことで、その意義を否定するものでないが) 人類の文化の中で持つ学術の価値(文化としての学術)が見失われる恐れが増してきた昨今の傾向を見るにつけ、茅コンファレンスのような学術的会合がまた一つ消えてしまうのは何とも惜しいと思われる。現在の風潮を考えると、困難な事とは思いますが、茅コンファレンスのレゾン・デートルを引き継ぐ会議が新しい構想の下に生まれることを期待する。

茅先生から頂いた一つの遺言

宇奈月の茅コンファレンスには、先生はお元気にご出席いただいたが、お元気に、シニア・コースのエクスカージョンを含む総てのセッションご出席くださった。そのときのスナップ写真が下の写真である。この写真から、ステッキをお使いになって元気にお歩きになっている様子を垣間見る事が出来る。



さて、このコンファレンスで特筆すべき事として、茅コンファレンスにご出席になった総ての方々にお伝えしなければならないと思う事がある。会議の日程が総て済んでから、休憩室で頂いた先生のお話しである。これは私にとって先生の遺言として心に刻み込まれることとなった。そのときの先生のお話は、次のように要約される。

「あなた方は私が何故中国との交流に熱心なのかと思うかもしれないが、それには次のような理由がある。日本と中国の間には、皆さんもよく知っている不幸な過去があるが、日本が中国の広い国土を制圧した挙句降伏することになった際に、大勢の旧日本軍の軍人たちが広い中国の奥地から撤収しなければならないことになった時の事である。

通常、このような場合には、先ず降伏した国の軍隊は、即座に現地で武装解除され、港まで移送されて帰国の船に乗せられることになるが、当時の中国の指導者であった蒋介石さんは、武装解除せずに港まで移動させ、乗船に当たって武装解除するという異例の措置をとってくれた。

このような判断は、蒋介石氏が日本留学の経験から、日本の文化の特徴を十分理解しておられ、天皇の終戦の詔勅が出た以上、港までの長い道程を整然と事を構えずに引き上げるであろうと確信したから出来たものである。

一方、万一現地で武装解除した場合を想定すると、日本兵に対する中国人民の恨みは強く、日本兵達は港まで無事に帰ることは覚束ないであろうと考えたのである。

この英断によって、大勢の兵隊たちが無事に帰国することが出来たのである。日本兵の大部分は一般の日本市民であって、徴兵状によって召集され、心ならずも家を離れて遠く戦地に赴いた者たちであって、無事に家に帰ることだけが彼らの希望であることを蒋介石が信じてくれた故に可能となったことである。

このような恩義は決して忘れてはならない、諸君も今後このことを忘れずに、中国のため、台湾のために尽くすよう努力して貰いたい。」

この教えを私は生涯忘れられない。中国と限定せずに、アジアの中の重要な文明国家の一員として、中国をはじめアジア諸国との協力関係を大事にして、機会が在るたびに彼らに協力して生きて行きたいと思う所以である。

(電気通信大学名誉教授)